

子どもの安全

5つのテーマ

自殺の予防

交通安全

高齢者の安全

子どもの安全

災害被害の防止

安心安全に健やかに育てほしい 子どもたちを、守る

子どもは地域の宝です。しかし、昨今、子どもが巻き込まれる痛ましい出来事が全国的に多く報じられ、それは交通事故、ネットトラブル等、多岐にわたります。セーフコミュニティでは、子どもの安全をテーマに「子どもの安全対策委員会」を設置し、対策に取り組んでいます。

取組①

自転車安全教室・交通安全マップ作成

市内では小中高生による自転車事故の割合が多いことから、交通安全意識や自転車の安全技術を高め、地域の危険箇所の認識を向上させるため、自転車安全教室や地域での交通安全マップ作成に取り組んでいます。

新中学1年生を対象とした自転車通学路体験事業では参加した児童が、地域の通学路を走行し、安全指導ボランティアとともに交差点などの危険箇所を確認し、安全な通学路を確保しました。



▲自転車通学路体験をする新中学1年生

市内では小中高生による自転車事故の割合が多いことから、交通安全意識や自転車の安全技術を高め、地域の危険箇所の認識を向上させるため、自転車安全教室や地域での交通安全マップ作成に取り組んでいます。

取組②

安全対策の啓発、子育てサロン新設への働きかけ、子育て情報の発信



▲「おうちの中の危険箇所・事故予防チェック」

0～4歳児の家庭内での事故が多いというデータから家庭内でのケガを防ぐために「おうちの中の危険箇所・事故予防チェック」を作成し、市内の園や子育て支援センター等を通して1000世帯に配布し、啓発をしました。チェックシートを配布した方にアンケートを実施したところ「今までに自宅でヒヤッとしたことがありませんか?」という問いには91%の方が「ある」と答えました。チェックシートを使い、予防対策を行うことで、事故が減少することをめざしています。

市では、誰もが健康で安心安全に暮らせるまちづくりをめざして、セーフコミュニティに取り組んでいます。セーフコミュニティとは、WHOが提唱する「事故やけがは予防できる」という考えに基づき、科学的な予防対策とまちぐるみの連携によって事故やけがを防いでいこうとする世界基準の取り組みで、今年の秋の認証をめざしています。地域の特性や課題に基づいて、優先して取り組むテーマを5つ設定し、それぞれの対策委員会によりさまざま取り組みを進めています。

セーフコミュニティ こうか みんなでつくる安心安全なまち



認証取得に向けた現地審査の期日が10月21日(水)・22日(木)に確定しました。
※詳細は10月15日号でお知らせします。

取組③ ネットトラブルを防ぐ研修の実施

「地域総がかりで、子どものネットトラブルを防ごう」をテーマに、情報端末機器利用時のフィルタリング率や家庭でのルール策定率の向上をめざしています。従来からのPTAによる研修の充実に加え、モデル学区住民を対象に「情報端末機器にかかる安全講習会」を開催し、市民への啓発に取り組んでいます。



▲情報端末機器にかかる安全講習会の様子

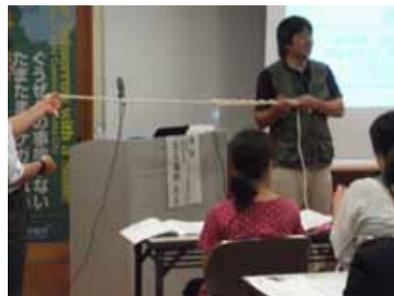
希望ヶ丘学区講習会参加者の事後アンケートからは、「情報端末機器を買い与えることについて、危機意識が高まった」との声が多く寄せられました。

取組④

自然体験活動の安全な実施

子どもたちの成長にとって、自然体験を伴う活動はとても大切なものです。しかし、自然体験活動ではひとたび事故が起こると、骨折をはじめとする大ケガや、重大な事故につながる可能性があります。子どもの安全対策委員会では、地域や団体において、安心安全に自然体験活動を実施するための支援として、実施状況の調査等を行っています。

指導者等研修会への参加団体から、実施状況や事故の有無などの報告を受け、その中から得られた気づきを今後につなげていく取り組みをしています。



▲自然体験活動指導者等研修会の様子

問い合わせ
危機管理課 セーフコミュニティ推進室
☎6211805 / ☎63-4619

「おうちの中の危険箇所」啓発を受けた 藤井真奈美さん



家の中で子どもにとって危険なところは気を配っていたつもりでしたが、それ以外にもまだまだ危険箇所があることに驚きました。

事故やけがを未然に防ぐという、セーフコミュニティの考えは素晴らしいと思います。私は母親として、「子どもの安全」が最も身近ですが、同じように5つのテーマにおいて、みんなで取り組めればいいと思います。

自然体験活動指導者研修を受けた 甲賀第1団ボーイスカウト隊隊長 森口充さん



これまで何度も活動してきた場所は下見を疎かにしがちです。

セーフコミュニティの取り組みである自然体験活動指導者研修を受講し、そこで学んだ「直前に行く下見」を実施しました。

よく知っている活動場所であっても注意すべき新たな発見があり、現在の状況を再確認できました。未然に事故やけがを予防し、安全にプログラムを実施する手がかかりが増えたことを実感しました。